

50周年を迎えたニュータウンへの提案

小森 星児（復興塾塾長）<s-komori@maia.eonet.ne.jp>

明舞団地まちびらき 50周年記念事業のオープニングイベントに基調講演者としてお招きを受け、光栄です。神戸まちづくり研究所は10年以上にわたって団地再生のお手伝いをしていますが、特に私は、50年前、隣接の台地にあった神戸商科大学に赴任し、このあたりの原風景を見聞しているだけに感無量です。

開発当初の団地は、丘の上の別天地でした。明舞は中央幹線が南北3キロにわたって貫通している古い構造なので、50年間に更新された部分と、開発時そのままの景観を残す部分が一望できるのが興味深いところです。特にセンター地区に隣接する松が丘公園は、開発前の姿をしのぶ貴重な空間となっています。

高度成長期に大量に流入した若い世帯に対し、手の届く範囲で快適な住宅を供給する住宅団地の役割は重要でした。同様なニーズは西欧諸国でも、また東欧、ソ連でも高まりましたが、ハードの質の高さについて明舞団地は先進モデルだといえるでしょう。

先進性の指標として、よくシリンダー錠と浴室が挙げられます。その当時は、普通の住宅では道路と敷地の境はあいまいで、住宅でも縁側は公的空間と私的空間の緩衝ゾーンでした。玄関もガラス戸で、内と外をぼんやりと仕切るものでした。鉄製の扉とシリンダー錠は、外部からの侵入を断固としてはねつけ、家族のプライバシーを守る象徴だったといえます。

銭湯に代わる内風呂もまたプライバシー優先を表しています。ステンレスの流し、上下水道、電気ガス、風呂トイレなどが揃って、ようやく外部のサービスに依存しない自己完結的なマイホームが狭い空間で実現したのです。

またショッピングセンター、公共プール、公園、総合病院、駐車場などの施設も整備され、従来の団地開発との差別化がだれの目にも明確でした。先進的だったのはハード面だけではありません。全国的にみても、夫は外では猛烈社員、内ではマイホームパパであったのに対し、主婦はわが子のために幼稚園増設から高校全入まで同じ間取り、同じ境遇の団地妻たちと一緒に戦いました。こうした下からの民主主義の高まりが、40年代後期に始まった革新自治体旋風を巻き起こしたのです。

しかし、団地の隆盛は永く続きませんでした。隅々まで計画的に作られた結果、新しい変化に対応できなかったのです。このため家族や所得が増えた住民が外部に流出する一方、新しい都市機能や意欲的な住民を迎えることができませんでした。初期に設定した条件に適合する機能や住民だけが残るという事態を招いたわけです。

今、必要なことはかつての団地が持っていた先進性を取り戻すことではないでしょうか。新しいライフスタイル、新しいビジネスを積極的に育てる試みが必要です。私の提案は「子育て」特区を目指すことです。ハード的な条件は整っているので、決して実現不可能だとは思われません。

（本稿は5月24日の講演で割愛した個所を補筆したもの）

復興塾・まち研メンバー紹介「群像 10」

群像XXVII「中堅の自覚」

相川康子 (NPO 政策研究所専務理事)
<LET07723@nifty.ne.jp>

神戸新聞の記者・論説委員 (約 20 年) から神戸大学教員 (3 年) を経て、現在は NPO 政策研究所 (NPA) というコミュニティシンクタンク役員 of 肩書きで、地方自治や参画・協働、コミュニティ、防災にかかわる仕事をしています。阪神・淡路大震災の前から環境問題や人権問題に関心を持って取材してきましたが、震災後に自分の力不足を痛感し、ファシリテーター養成講座に通ったり、神戸商科大学 (当時) の社会人院生になって市民事業や中間労働市場に関する調査研究をしたり、NPA や神戸復興塾に入れてもらうなどして、知見や人脈を広げる努力をしてきました。



当時は「若手」でしたが、いつの間にやら「中堅」(“お局”という声も) と呼ばれるようになりました。体重の増加と同程度に「貫録」や「実績」も身についたと思いたいですが、さていかに。公益認定や助成金審査など、人様 (時には仲間) を審査する仕事の増加に伴い、性格の悪さに拍車がかかっているような気がして、一人落ち込むこともあります。

最近、神戸まち研が事務局を委託した防災リーダー養成講座を真面目に (?) 受講し、防災士の資格を取得。これからも意識的にインプットの機会を持たねば、と決意している今日この頃です。

群像XXVIII「阪神・淡路大震災」

浦上忠文 (神戸市会議員)
<tadafumi@uragami.jp>



うらがみ忠文です

阪神・淡路大震災の翌月。避難所の PTA 会長代表として、全国朝日放送の「朝まで生テレビ」に出演しました。

「復興より、まず復旧を。まちを元に戻せ！」が、私の主張でした。もう一つ「神戸空港を文明論的には否定しないけど、今、急ぐこととちやうやろ」も、主張でした。テレビに出て、あれこれ言ったけど、それが被災者の何の役に立つやろ？ここはちょっと、神戸市会議員になって、議場で主張しようと、人生を変えました。その年の秋、ある市民集会の帰りに、「あんた、面白い人やなあ」と、大津さんに肩を叩かれたのが、復興塾との関わりの始まりです。

60 代半ばで亡くなりましたけど、長田区選出の男気のある議員の発言が忘れられません。「ええか、長田の復興住宅には、鉄の扉を付けるなよ。婆さん、そんなもん開けられへんで。それと、中に風呂はいらんで。復興住宅の真ん中に銭湯を作るだけでええでそやないと長田は、潰れんで」今にして思えば、名言です！

壊れたから新しくしようでは、あまりにも寂しい考えです。

ひとりひとりの人間は、
今を生きてんねんからなあ・・・。

寄稿『東日本大震災復興支援の取組』

久一 千春（バレンタインチーム代表） <LET07723@nifty.ne.jp>

<バレンタインチームときっかけ>

バレンタインチームの代表久一千春の実家が宮城県であることから3月11日は、必至に家族や仲間の安否確認をする中、同じように安否を確認する人達とネット上で繋がり情報を共有した夜でした。

その後すぐ、関西や関東の友人達に避難所ごとの安否確認データをとる作業を手伝ってもらい、宮城県警、宮城県庁、などにメールで情報を送る事ができました。また、情報を共有し現地の状況を把握することで、物資のマッチング作業などを行うこともできました。現地入りする事ができた2011年4月から私の仲間を『バレンタインチーム』と名づけて、毎月のように南三陸に行くようになりました。

<現地入りしてから>

当初、瓦礫処理、泥だしなどをしながら合間には、ネットでやりとりしていた避難所の方々や、自宅避難している方に必要物資を届ける作業をしていました。1人ではできないことでもみんなですればできる事がある、全国の人が訪れている姿は、きっと希望が持てる、まずは、現地の方々が少しでも未来が見えること、そんな思いからの活動でした。

避難所から仮設住宅に移ってからは、現地の声を聞き、コミュニティの場の必要性を感じました。集会所を現地の方々に利用するきっかけを作ろうと、『憩いの場』と名付けて集会所でのお茶会を中心に仮設住宅の訪問が始まりました。助けあう形を構築したくて、リーダーさん探しをしながらの活動を続けています。

<活動の広がりや人との出会い>

生活を元に戻してあげたい、どうしたらまちを作れるか...と思った時、阪神淡路大震災の時はどうしたのだろうと振り返りました。阪神淡路大震災の4ヶ月前に宮城県から神戸に来て震災を味わっているのに、自分の事で精一杯で、仮設住宅から災害復興公営住宅にどうやって移り住んでいったか、どうやって復興の道を歩んだか...1つもしなかった事をあらためて実感しました。活動する中で沢山の方との出会いがあり、沢山の事を知りました。中でも神戸復興塾3.11支援集會に参加させてもらう事は大きく、過去を紐解くきっかけになり、まちづくりの事を知ることができました。現地の方々が集まってまちづくりを考えていくことが大切ということを感じた私達は、それからの仮設住宅での訪問で、お茶っこしながら、知った事を伝え、きっかけ作りを視野に入れて訪れているうち、現地の方のまちづくりワークショップをお手伝いすることもでき活動の幅が広がりました。

仮設住宅の訪問から2年経ってようやく、『リーダーになってしてみようかな』と言ってくれる方が現れたり、現地バレンタインチームメンバーができたり、続けているからこそできる事もあると実感しています。沢山の縁もいただきました。これからは、沢山の人の知恵をどうにか現地と結びつける活動ができれば、高台移転などで想像できる問題を解決したり、雇用を増やしたり、産業形成に結びつけられると考えています。また、この人とのつながりの力を借りて、地元神戸にきている県外避難者の方々にサポートできるような体制をとともに考えていきたいです。

発行: 特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所・神戸復興塾

編集担当:
山地久美子

〒651-0076 神戸市中央区吾妻通4丁目1番6号 TEL: 078-230-8511 FAX: 078-230-8512

E-mail = LET07723@nifty.ne.jp Homepage = <http://www.kobe-machiken.org/>

まち研ニュース 23号

「マネーvs 里山」資本主義

小林 郁雄（神戸まちづくり研究所理事長）<ikuo-ko@kcc.zaq.ne.jp>

藻谷浩介＋NHK広島取材班著「里山資本主義」（2013年7月、角川ONEテーマ21）を読んだ。藻谷さんは日本政策投資銀行におられたかなり以前から知っていたが、2010年3月一年間のシンガポール出向のもうすぐ帰国するという時に、新開発住宅地、歴史的町並み、リバーサイド再整備などほぼシンガポール市街地中心をくまなく案内してもらった。暑い最中はほぼ丸一日歩きづめで、まちを歩き巡ることは苦にならない同行の千葉さん(UR)、難波さん(兵庫県)、芦田さん(元・豊中市)とともに、健脚モタニには感服。この調子で日本全国市町村の99.9%、海外59カ国を訪ね、現場から考えるのかと、実感した。

帰国後10月に熊本で全国まちづくり会議のコメンテーターに来られたので、お礼の挨拶にいったら、こんな本を出しましたと「デフレの正体」（2010年6月、角川ONEテーマ21）をいただいた。既に話題の本となっていたが、まさか50万部の大ベストセラーになるとは。また、翌年東日本大震災に、復興構想会議専門委員、朝日新聞「ニッポン前へ委員会」委員やTV出演も含め、すっかり時代の寵児となった。

さてそこで「里山資本主義」であるが、世界経済を支配するマッチョな「マネー資本主義」の限界を見極め、マネーに依存しない安心を買う別原理としての生きる道を提示する。身近にあるものから水、食料、燃料の相当部分をまかない自然循環の中で生きていく、地に足の着いた確かさ。「里山資本主義は、マネー資本主義の生む歪みを補うサブシステムとして、そして非常時にはマネー資本主義に代わって表に立つバックアップシステムとして、日本とそして世界の脆弱性を補完し、人類の生き残る道を示していく。爽やかな風の吹き抜ける未来は、もう、一度は忘れ去られた里山の麓から始まっている。」と結んでいる。

私は見たことがなかったが、ドキュメンタリーシリーズでNHK広島制作中国5県限定放映の、エコストーブ、ペレットボイラー、バイオマス発電、集成材クロス・ラミネーティッド・ティンバーといった木材利用をベースに、地産地消野菜、地域通貨、高齢者福祉と子育て環境の統合など、マネーに依存しない里山資本主義の見事な事例が紹介されている。

これらの根本に東北3・11の「いざとなったらマネーなど何の助けにもならない」という思いがある。阪神1.17の時も同じことを思った。それが「小規模分散自律生活圏の多重ネットワーク社会」という将来像であった。それを支えるのが里山資本主義なのか。